

総合教育会議記録

1. 日 時 平成27年5月25日(月) 午後 4時00分 開会
午後 5時12分 閉会

2. 場 所 条里南庁舎 会議室

3. 出席者 横手市長 高橋 大
横手市教育委員会
教育委員長 二階堂 衛
教育長 伊藤 孝俊
教育委員 橋本知加子
教育委員 柴田 康裕
教育委員 加賀谷長吉

4. 説明のため出席した者(8名)

総務部長	高橋 実
総務課長	栗田 律子
教育総務部長	柴田 恒宏
教育総務部次長兼教育総務課長	高橋 功
教育総務課主幹	山本 信夫
教育指導部長	石川 淳
教育指導課長	鈴木 雄幸
学校教育課長	飯野由貴男

5. 事務局 総務課文書法規係長 佐藤 和志
教育総務課総務係長 富山 直美

6. 会議に付した事件

- (1) 横手市総合教育会議の運営について
- (2) 横手市の教育に関する大綱について
- (3) 横手市の教育について(意見交換)
- (4) その他

7. 会議の経過と結果

開 会 午後4時00分

●柴田教育総務部長

ただ今から平成 27 年度第 1 回横手市総合教育会議を開会する。会議の事務局は総務部総務課及び教育委員会教育総務部教育総務課が担当し、本日の進行は教育委員会教育総務部長が担当するのでよろしくお願いする。はじめに、市長、教育委員長、それぞれからご挨拶をいただく。

●高橋市長

教育委員各位においては、平素から教育行政全般にわたり格段のご高配を賜っていること、またご指導、ご鞭撻いただいていることに感謝、御礼を申し上げる。

このたびは地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部が改正されたことに伴って、1 回目となる総合教育会議を設けさせていただいた。行政当局と教育委員会は法改正後も個別の権能を持ちながら今後も運営されることになるが、さまざまな社会問題があることを考えると、思いを共有してそれに立ち向かっていかなければならないし、より一層の連携のもとに運営していただくというのがこの法律の趣旨だと理解している。皆さまから引き続きさまざまな見地に立ったご意見、ご指導を賜りながら市としてもそれに応える形で努力してまいりたいと思うので、よろしくお願い申し上げます。

●二階堂教育委員長

これまでの青少年の凶悪な犯罪、その上の代、さらに上の代と年を追うごとに犯罪に巻き込まれていたり、起こしている昨今である。教育という立場で人々をいかに導いていくことが大切なのかということを改めて考えさせられている。今会議では思うところを話し合いながら、横手市としてより良い教育を目指していこうという会議であるので本日はよろしくお願いする。

(1) 横手市総合教育会議の運営について

〔説明〕

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

【〔議題 (1) 資料〕を基に説明】

〔質疑〕

なし。

●柴田教育総務部長

本案を了承することにご異議ないか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

●柴田教育総務部長

今後の総合教育会議においては本要綱を基にして運営させていただくので、よろしくお願いする。

(2) 横手市の教育に関する大綱について

〔説明〕

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

【〔議題 (2) 資料〕を基に説明】

〔質疑〕

なし。

●柴田教育総務部長

今年度の教育大綱については、現在の教育ビジョンを基本にし、今後の大綱については現在取りかかっている総合計画策定と同時に総合教育会議での意見交換などを経て作成していくのでよろしく願います。これにご異議ないか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

●柴田教育総務部長

異議なしと認め、教育大綱についてはそのように決定する。

(3) 横手市の学校教育について（意見交換）

〔説明〕

●伊藤教育長

【〔議題（3）資料1〕を基に、平成27年度における横手市教育行政方針について説明】

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

【〔議題（3）資料2〕を基に、横手市の学校教育の現状について説明】

●柴田教育総務部長

2件についての話題提供があった。ここからは自由討議としたい。横手市の教育に関し日頃からお考えになっていることについて、それぞれからご意見をいただきたい。

●高橋市長

子を持つ親の一人であり問題は認識していたので、「子ども未来係」については早目にやるべきだと思っていた。これはスタートであり、もっと発展形をイメージしている。生後は行政が面倒を見て、その後に幼保、教育委員会の範ちゅうにある小中学校へ進み、高校は県に行き、その後は大学か社会人へと進み、いろいろと問題を抱えたまま成長して社会人になっていくケースもあるが、中学校から高校へ、高校から社会人に移るときにその情報が途切れてしまい、たまたま福祉等で訪問した際に就労に至らない人を発見したりすることもある。情報が途切れることが原因で社会人になって一から出直しするというのは、行政が一本になっていないことの弊害だと思うし、非効率的な部分だとも思っている。まずここは第1段階として、幼保から小中への引き継ぎの部分でしっかりと連携することであり、それが県に対しても見せられる手本になると思う。市としては、行政当局と教育委員会が連携していきたいという思いがあった。教育方法については私がとやかく言うようなことではなく、先生方に引き続きがんばっていただくようお願いするだけだ。

●二階堂教育委員長

教育現場に触れる機会が多く、自信を持って横手市ではいい教育がされているという思いはある。ただ、学校での教育には限界がある。より良い教育を目指してはいるが、それが果たして家庭教育までしっかりと行き届いているのか。横手市に限ったことではないし、県内の他の地区や県外に多く見られる現象だが、親自体がおかしな方向に向かってしまっているという思いもある。子どもたちは親を見て生活しているので、家庭の中がそうだとすればいくら学校ががんばっても結局は子どもがおかしくなってしまうという現象が少なからずある

と思われる。これからは親の教育についても課題の一つとしてあげて考えていかなければならないのではないか。

●橋本教育委員

教育委員としてお世話になっており、教育長訪問にも同行させていただいている。私は関西で育ちそれはそれで良かったと思っているが、横手のこのような環境で子どもを育てることができたことも良かったと思っている。その環境は今後も大切にしていきたい。学校訪問の際に見る子どもたちの表情はとても素晴らしく、キラキラした表情は子どもたちに一生持ち続けてもらいたいと日々感じている。親に対する教育について話が出ているが、そのようなことも必要になってくるだろうと思う。市長が「思いを共有して」と言われていたが、行政と教育委員会が一つになれば教育行政はもっと発展していくと期待している。

●柴田教育委員

結局、親に対する教育ということになれば社会教育の充実が求められてくることになる。このたび生涯学習課が教育委員会から市長部局に移ったので、これからはしっかりと連携していかなければならないと感じている。幼保の関係ということで行くと、保育園は厚生労働省で、小学校は文部科学省が所管しているが、省庁を跨いだ関係にあることが子ども未来系の活動に支障をきたすのではないかと危惧している。その危惧はしっかりと取り除いていかなければならない。学校の教育環境を充実させて一生懸命やっているわりには子どもの数が増えていっていない。データを見れば、体力、学力等、いじめの問題についても良い数値が出ているわりには他地区の保護者が横手で子育てをしたいと感じてもよいと思うが、それが数字に全然反映されてこないのは何故なのかということについてもこの総合教育会議で話をしていければよいと思った。今学校統合が進んでおり、立派な学校をつくっているのだから大いに利用していければと思っている。地域の学校にしていくためにも、地域の人たちが学校に関われるようなシステムを取り入れていけばよいと思う。学校統合の話はあるが、通学路の整備は遅れている。県の事業の関係も多分にあるが、子どもたちを守るという意味からも通学路整備は喫緊の課題になるのではないかと感じる。行政にも意識を共有してもらいたいと感じている。

●加賀谷教育委員

スポ少の観点から言うと、中学校の先生方がスポ少の指導に積極的に入ってくれているため、子どもたちが中学校に入学しても不安なく部活動に入っていけているのではないかと感じている。Y8サミットではいじめ対策をテーマとされていた。皮肉かもしれないがその報告がきれい過ぎるという感じがしてならなかった。昨年の成果はどうだったのか今年はいじくり訊いてみたい。郷土の歴史については、小中学校に積極的に出掛けて行ってやっている。中学生がその歴史ガイドをしていて、そこまで興味を持って取り組んでもらえれば、出前講座というのもいいのかなという気がしている。

●柴田教育総務部長

では、それぞれが今考えていることについてお互いに意見交換をしていただきたい。

●高橋市長

教育はよりよい社会づくりの基礎だ。学力だけをただ上げればよいというものではない。人の社会なので、人の質、知力も心も体力もよくなければ、いくら道路を整備しても、役所がしっかり仕事をしても、人がダメなら追いつかない。逆に民度が高く教養も高ければ、こ

の地域で暮らす気持ちの豊かさも自分自身で発見できるだろうし、環境の整備や安全への取り組みについても協力的にそれを理解して住民が自ら動いてくれるだろう。子育ての部分、親としての素養や人としても全部が教育になる。「人は城、人は石垣」ではないが、いくら社会基盤、インフラを整備しても、結局はそこに住む人しだいだと思っている。行政運営をするにしても、基礎の中の基礎が教育だと思う。親にも教育が必要だが、一番すんなり吸収し易いのは子どもであり、子どもへの教育に関連させて実はその背後にいる親御さんにも伝える形があっという感じている。社会現象として人口減少が進み現在の低迷があるが、その根本にはいろいろあっても、この地域の暮らしがまんざらでもないという思いがあれば違ってくる。この地を離れなければならないのなら、後ろ髪を引かれながらこの地域を旅立ってもらいたい。教育にかけた投資は何らかの形で返ってくるのだと思う。成功すれば地元に戻ししてくれることがあるかもしれない。バスケットボール界の長谷川誠さんにしてもそう。地域への思いについても、教育の中で大人が意識付けをしていけばいいのであって、親自身にこの地域の良さに気付いてもらうため行政サイドも今後しっかり努力していかなければならない。教育水準の高さは企業誘致の際の材料にもなると思う。いろいろ連携することによって地域がよくなることはいくらでも見出せる。気付いた点を出し合って行政側の取り組みに生かしていければよいと思っている。

●二階堂教育委員長

40年先の統計も出ていとおりに、人口減少はどうにもできないことだと思う。人口減少に関しては、どちらかと言えば教育というよりは市の発展性のほうが優先されることになるだろうから、子どもの減少、出生率の減少は致し方ない所はあるのでないか。だとしたらどうすればいいのか、その方策を考えていくほうが現実的だ。やらなければならないことはたくさんある。

●柴田教育委員

これが急激に改善されることは在り得ない。保育園、幼稚園は満杯で入らせてもらえないという都会の話をよく聞く。働きたくても働けない状況が都会にはある。そういう所は子育てに関しては育てにくいことになる。それに比べれば横手市は保育園、幼稚園は充実しているし、こんなにいい学校もあり、これだけの教育環境がある。経済は別問題として、子育てに関して言えば非常に充実している。「子育ては横手市でやりたい」と言われるように、どんどん情報を発信してほしいと思う。

●二階堂教育委員長

人口5万人以上の都市の中で子育てしやすさ日本一にランクされたほどなのに、人口が減少傾向にあるというのは何かしら他に原因があるのでないかと考えざるを得ない部分がある。

●高橋市長

少子化は経済や社会変化に関係する部分もあるとは思いますが、人の私生活に土足で踏み込むくらいでないと解決できないこともある。昔と違い結婚や出産については誰もとやかく言わなくなった。個人の自由、ライフスタイルの自由を謳歌するのは結構だが、社会が持続的に継続的に維持されていくためにはそれ相応に子どもが生まれないと維持できないわけで、自由も大事だが社会の一員であり社会を維持するために子どもを産み、育てるという意識を少しばかりでも持ってもらわないと社会が困ることになる。言い過ぎれば問題になるが、ある

程度の空気を醸し出していかなければ世の中が持たないという現実もある。高齢者が集まる場でよく言っているが、「少子化に対する貢献はどの年代でもできる。高齢者の自分たちには関係ないとは思わないでほしい」と伝えている。

●伊藤教育長

雇用促進など社会的な面で、今抱えている社会構造そのものを話し始めると膨大で手に余るところが多い。総合教育会議なので学校教育という視点で見ていく。これまではどちらかと言えば中央に行って良い大学を卒業して一流の仕事人になるということが、秋田県のみならず田舎の都市の最大の関心事だった。これには誰も不賛成な人はおらず、そのイメージをいつまで持っている県なのかということが今問われている。秋田県人は今でも持っているが、優秀な人口が流出してしまって、秋田県に何らかの見返りがあったかと言えば甚だ怪しい。一定の人生設計だけでなく、それを広げた人生設計ができる教育が今必要なのだと思う。小中学校では何ができるかと言えば、キャリア教育などもあるが、生まれたときから「横手はいいよな」というような教育をどれだけしつこくできるかということにかかってくると思う。自分自身も横手のことについて勉強した記憶がまったくない。社会科の中での雪国の暮らしのイメージ、教科書の一部の知識しかない。それが今までの学校教育だった。秋田県では「ふるさと教育」と称して郷土学習を進めるという大変良い施策もあったが、ふるさと教育というのはその地区のことについて学習するのであり、そのためその地区のものの見方しかできなかった。それをせめて10万人の横手地域まで広げて横手はどうなのかという問題意識を幼少の頃から植え付けてあげればプラス思考のふるさと学習が可能になり、そこで「よこてを学ぶ郷土学」を考え出した。まだ形にはなっていないが、今までとは違うレベルまで育てていければ、何人かは生き方を変える子どもも出てくるのではないかと思う。何年かかるかはわからないが、今それを確実に始めていかなければ間に合わないし、少子化にも歯止めがかからない。市長はいろんな方法でいろんなことを考えることになるが、教育委員会としてはその部分を取り立ててがんばりたいと考えている。

また、幼保の質も上げていかなければならない。幼保の質は数字に表れないため他と比べようがない。なぜベールに包まれているのかと言えば、それは行政が関与する度合いが大きいから。それが白日の下にさらされることによって実態が見えてくる。そこを頑張らないといけないと思っている。幼保に関わることは親教育につながっていくことになる。

●加賀谷教育委員

子どもたちを観察していれば、上下では遊ばないし、権利を主張する意識ばかりが強く見える。集まっても黙って座ってゲームばかりしている。それを許している親がいるわけで、その親も人の話を聞きながらスマートフォンを触っている。そういう感覚が理解できない。親がそうしているのだから説得力もない。親を教育するというわけではないが、そのあたりから徐々に何らかの形で導いていく必要があると感じている。

●高橋市長

I T関係の集結地帯、アメリカのシリコンバレーでは、その道で食べている知識の集合体の人たちの子どもへタブレットに触れさせることがないそうだ。なぜ触れさせないのかを突き詰めれば答えは見えてくるかもしれない。現代は子どもが泣けば買ってくれるビジネスが横行していて、子どもが欲するものに応えるビジネスに乗せられている。そのマーケティング

グに乗らないような抵抗もしていかないと、その呪縛から逃れられない人間に育て上げられていく。我々の社会もソフトウェアの方々にコントロールされるようになる。我が家もそうだが、知らずしらずのうちにその術中に組み込まれていき、普通に何の疑いもなく暮らしていくことになる。

スポーツ少年団で集まれば、ほとんどの子どもたちは各自が持ってきたゲームに夢中になる。ただ寄り添っているというだけで、これではコミュニケーション能力は育たない。何もない所から何もないなりの遊びを見つけるとか、発想して生み出すというのも能力の一つだが、現代ではゲームがないと楽しくできないという子どもたちがたくさん育ってきている。それは非常に残念なことだ。ゲームや携帯電話は誰かが持ち出すと拡散して行ってそれを止めることができない。話題がゲームになれば、持っていない子は話題に取り残されて仲間に入っていけない。いじめというわけではないが、かわいそうになりつついつい与えてしまう。マーケティングの術中に社会が完全にハマっている。ゲームの世界に社会が育てられていると感じている。

(4) その他

●高橋教育総務部次長兼教育総務課長

今回は、次年度の予算や平成 28 年度以降の教育大綱等について協議・調整していきたい。素案が確定する 12 月頃を目途に招集したいと考えているのでよろしく願います。

●柴田教育総務部長

これで平成 27 年度第 1 回横手市総合教育会議を閉会する。

閉 会 午後 5 時 1 2 分